

# 「いわんや悪人をや」

藤元正樹師述

この慢は七慢とか九慢というのですが、通常、慢、過慢、慢過慢、我慢、増上慢、卑(下)慢、邪慢と七慢が挙げられます。慢は等慢といわれます。相手と較べて同等だとする意識です。結構自分に自信のある心です。過慢は相手より自分の方が上だとする心です。慢過慢というのは、過慢の上に慢が付いています。つまり、相手にせぬということですが。我慢は、よく辛抱すること、よいことのように云われます。何くそまけるものかというのですが、あれも比較意識です。それから増上慢です。これは相手を見下すことですが、自己の過大評価です。それから卑下慢ということもあるのです。自分を必要以上に卑下することです。これも本当は僞慢の裏返しです。邪慢は自分に何の徳もサトリもないのに、徳があるように思い込んだりすることです。こうしてみますと、どんな人にもこの慢があることになりました。だから根本煩惱と云われるのです。だから、自分を悪人だとは思わない、自分よりもっともつと悪いことをしているのが悪人だと思ふています。このことが先ずあります。だから悪人ということと自分のこととは仲々分らない、どこかにいるやつが悪人だ。だけでも悪業とか善業というても縁に依るといふことがあるのです。「さるべき業縁のよほせば、いかなるふるまいもすべし」といわれています。善とか悪というのは、善業とか悪業

ということにおいて、「よき心、わるき心のおこること」が根本です。業はその意の表現ですから悪業が最も重視されます。そのこころのおこるのも業であるということです。これは意思のことです。心の中だけで思ふだけのことなら、あいつ殺してやりたいと思ふても罪にならぬというのが、此の世の論理です。だから裁判でも殺人罪と云うと計画犯罪であるか、つまり殺す意思があつたかどうかで罪が計量されます。しかし仏教では殺したかどうか罪の問題ではなくて、殺そうと思うたことが罪なのです。意思の方に重点をおくのです。ただその縁がなかつたと云ふことです。因は意思にあります。その意思も業に依るのです。それで悪業と云います。「よき心のおこるのもあしき心のおこるのも宿善のいまず故、悪業のはからふゆえ」なのです。

ですから、悪いことをして罪人になるというのでありません。「あしき心、わるき心のおこるのは悪業のよほす故なのです。」罪悪深重といわれるのは、罪の身としての悪なのです。罪が悪業なのです。縁さえあれば、どんな事をするかも知れん身なのです。そうゆう、深く重い罪を負ふていふことでもあります。自分を悪人とは思ふてもいふ罪といふものであります。

さて、最初に申しました通り、この悪人正機といふことが、始めて明確に取り上げられたのは、曇鸞大師の論註です。これは天親菩薩の浄土論を往生論としてとらへ直されたものであります。そこに八番問答といわれる一章(別章)

が置かれています。上巻つまり願偶を説き終る(竟)といふ句が浄土論にあります。竟は終つたところから始まるということです。(中略)それを受けた感動から逆に始まること、出発点を語るものである。

つまり、如来の回向ということであらわす。浄土に生れることによつて今度は浄土を創つてゆくのである。浄土に生れて終りと云ふのではない、そこから今度は浄土を背負ふて生きるということが始まる。そこに浄土の歴史がある。阿弥陀仏を見んと願するということは、願生といふだけでなく願見である。願生安楽国が願見弥陀仏と云えられている。願見弥陀仏ということが普共諸衆生ということを要請する。つまり一人では弥陀仏を見ることは出来ぬと云ふことである。衆生と共にということが前提である。衆生と共に阿弥陀仏を見たてまつると云ふのである。つまり公開性である。閉鎖的であるなら阿弥陀仏は見ることが出来ない。つまり、花は開かぬ胎宮の世界である。信心清浄華開即見仏ということ。衆生と共にいふところに花開きて仏を見たてまつるといふのである。ただこれが無ければ含花未出ということである。公開された願生心といふもののみが願見弥陀仏を果すのである。これが回向門であると曇鸞は教えている。

そこで忽に、一体そこで云われる、普共諸衆生の共たる衆生とは如何なる衆生であるか、ということが問題にせられる。それが八番問答として述べられる部分である、この一句が問

答において註解せられてるのである。

共にある衆生というのは、天親菩薩が共にといわれる衆生のことであるけれども、普共諸衆生であるから特定しなくてもよいのでないかということがある。だけでも、それを敢えて問ふのは、誰でもいいという意味で普共諸衆生と云ふのでないということである。誰でもよいと云ふなら、諸衆生と云ふ必要もない。諸衆生というのは誰でもない衆生ということではない。そんな衆生というものは無いのと一緒である。普共諸衆生というのは天親菩薩にとって運命を共にする者ということである。だから普共諸衆生という場合、誰でもないということではない。

一切衆生というものを代表する衆生というものではない。衆生に九品あるけれども、どんな衆生が共にと云われる衆生なのかということである。それは大経では十八願成就文に示される聞其名号信心歡喜の前に諸有衆生とある衆生である。この衆生は乃至十念とあるから、觀經では下々品の衆生である。そこに大経の場合は、唯除五逆誹謗正法とあります。つまり五逆の者と謗法の人は救われぬとあります。それに対して觀經下々品の場合は、五逆十惡具諸不善のものもまた往生出来るとあって、謗法の者は救われぬとあります。その説く処に相違があります。つまり大経では五逆謗法が救われぬのですけれど、觀經では五逆の者は救われて謗法は救われぬということになっていきます。そうすると、五逆の悪人と謗法の悪人との區別があると云ふことになります。つまり五逆

よりも謗法が罪深いということになります。それは何故なのかということですが、これは面白い問題提起でしょう。

五逆というのは一般に五逆罪というて社会的な倫理性を基本としているものです。併し謗法というのは個人的なものです。仏法僧を否定するのですから、まあ今日の言葉で云ふと無神論です。それは、その人の勝手であると云ふてよいわけですが。別にそのことが他人に迷惑をかけるわけでもないですから、罪があるというわけでもない。だから謗法の方が五逆より軽いといわなければならぬでしょう。ところが仏様は、五逆の罪は臨終十念の念仏で阿鼻地獄に一劫の重罪を受けるだけだと。謗法の者は阿鼻地獄に墜ちて、その劫が尽されれば亦、他の劫に転じて百千の地獄の中に在って、その地獄から出る時を明確にされていない。つまり謗法の罪が五逆の罪よりもはるかに重いことが示されてあるのです。それは何故かということですが、

その答えは、五逆罪ということは何故起るのかということにあります。それは正しい法を伝えられないからであると。正法が伝えられないということが五逆の根本だということです。つまり教育ということでしょう。教育というのは正しい法、正しい人間の生き方を教えるということとです。その教育が正しい法に基かないから五逆を犯すことになる(この場合、小乗の五逆でなく大乘の五逆を云ふことに注意すること)。だから五逆より謗法の方が罪深いものであるということになる、と云ふのであります。つまり、五逆という倫理的社会的悪というものを突

き詰めてゆけば、その根本に謗法ということがあるということになるわけです。云いかえれば謗法こそ悪人の根本であるということになります。それは救われざる者であるということですから。

以下参考

設我得仏 十方衆生 至心信樂 欲生我國  
乃至十念 若不生者 不取正覺 唯除五逆  
誹謗正法

(仏説無量壽經第十八願)  
誦下し：たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが國に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く

意訳：わたしが仏になるとき、すべての人々が心から信じて、わたしの國に生れたいと願い、わずか十回でも念仏して、もし生れることができないうなら、わたしは決してきとりを聞きません。ただし、五逆の罪を犯したり、仏の教えを誹るものだけは除かれます。

五逆：殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧(教団を乱すこと)、出仏身血(仏身を傷つけること)  
謗法：仏法をそしり、真理をないがしろにすること

「唯除五逆誹謗正法」といふは、「唯除」といふはただ除くといふことばなり、五逆のつみびとをきらひ、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつの罪のおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとせんとせんとなり。(親鸞聖人「尊号眞像銘文」)